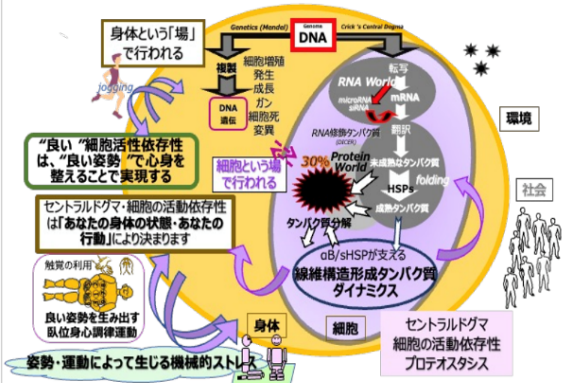


人生 100 年時代を思慮深く健やかに生き抜くために、教育にもっと科学的思考を取り入れる必要がある。問題解決する力や意欲の育成のためには「教授法」の開発だけでは困難であり、学習者自身が自ら取り組もうとする態度が必要である。その態度を養う方策として、最も身近な自分について科学的に思考し文理融合的に体と心のつながりを理解する「身心一体科学」(跡見 2018, 2024)を学校教育や生涯教育に適用する。それと同時に、「身心一体科学」を科学体系として確立するために、1. 身体と細胞との関係および、2. 脳と身体の体の使い方との関係について細胞科学、脳科学的なアプローチによる研究も進める。

わが国の子どもたちは「理科離れ」が問題となっている。新学習指導要領では理数教育に重点が置かれ、科学的な見方や考え方から他者と関わりながら主体的に問題解決を図ろうとする人材育成の醸成を目指している。しかし、問題解決する力や意欲の育成のためには、アクティブ・ラーニングや、ICT 教育、STEAM 教育による文理融合型学習のような「教授法」の開発だけでは困難であり、子ども自身が自ら取り組もうとする態度が必要である。そのような意欲を引き出すには、「教授法」と両輪となる、健康な精神や身体の「ウェルビーイング」な状態が重要であると言える。そこで本提案では、自分の身体の内に棲む細胞（いのち）の可能性を生かす「身心一体科学」とウェルビーイングをつなぐ細胞の可視化や自分自身を対象にした実験的な科学教育を構想する。そのために、効



考え方と方法 ― 細胞・体軸・エネルギー代謝を意識  
でつなぐ  $\alpha$ B-クリスタリン適応理論(跡見順子 2024 東京大  
学出版会)

③ 学術研究構想の名称

④ 学術研究構想の概要

本研究は、基礎調査 10 年（1 期）、実践 10 年（2 期）、定着 5 年（3 期）の 25 年で構成されており、日本女性科学者の会（SJWS）の 6 ブロック地域（北海道、東北、関東圏、東海、関西・中四国、九州）に「教育可視化ネットワーク拠点」と「身心一体科学研究拠点」を設けて活動を進める。本研究構想の中核は、「身心一体科学」体系を確立し、体制制御調律運動による自ら学ぶ力と深い思考力をもつ人材育成に貢献しうる新し

図2 身心一体科学がうみだす社会と産業 自分を科学するには、身心一体学を背景とした「ウェットな身体」を「ドライな評価系」につなぐ媒体の開発が必要である。